

令和7年8月29日

令和6年度 特別の教育課程の実施状況等について

長野県		
学 校 名	管理機関名	設置者の別
信州大学教育学部附属松本小学校	国立大学法人信州大学	国立

1. 学校における特別の教育課程の編成の方針等に関する情報

学 校 名	特別の教育課程の編成の方針等の 公表 URL
信州大学教育学部附属松本小学校	https://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/education/matsu-sho/guide/

2. 学校における自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学 校 名	自己評価結果の公表 URL	学校関係者評価結果の公表 URL
信州大学教育学部附属松本小学校	https://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/education/matsu-sho/guide/	

3. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

・計画通り実施できている ☒ 一部、計画通り実施できていない ・ほとんど計画通り実施できていない
--

(2) 実施状況に関する特記事項

※(1)で「一部、計画通り実施できていない」又は「ほとんど計画通り実施できていない」を選択した場合は、必ず記載する。

一部のクラスで学年の学習に必要な授業時間が確保されていなかった教科があったことが判明し、4月18日付けで本学に調査対策委員会を設置して、不備の実態、発生の経緯、管理体制上の問題を明らかにするための調査を開始している。

(3) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- ☒ 実施している
・ 実施していない

＜特記事項＞

年間2回行っている全校参観日の校長講話や来入児保護者対象の学校説明会の際に、『学びの総合化』を基軸として、幼小中一貫教育12年間で「たくましく心豊かな地球市民」を育む特別の教育課程を実施していることについて情報共有している。

4. 実施の効果及び課題

(1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している目標との関係

本特例は、幼小中の接続を大切に、未来を拓く教育を推進するため、幼稚園で遊びに打ち込み育まれてきた学びの芽を緩やかに統合し、学習の基盤となる資質・能力を心身両面からバランスよく伸長できるように、低学年では「遊びの領域化」(ことば・かがく・くらし・ひょうげん)を、高学年では「領域の教科化」として「技術科」を設置し、幼小中一貫教育12年間で「たくましく心豊かな地球市民」としての資質・能力を育もうとするものである。

① 効果について

【遊びの領域化】 小学校低学年7～8歳期

小学校教員が幼稚園の保育参観や保育参加を通して園児の姿や保育者が大切にしていることを語り合う中で、児童を支える理念や、児童のもつ資質・能力を発揮させるための援助のあり方を共有している。幼小の教員が目線を合わせた上で新1年生を迎え入れることで、児童が学ぶ環境を物理的にも心理的にも境目が少なくなるよう心がけている。これらにより、児童は、幼稚園の遊びで育まれた探究心の根をもとに、自分なりの方法で『思いや願い、問い』に向かって追究を始めることができている。また、教科の枠を柔軟に捉えた【領域】(【ことば】【かがく】【くらし】【ひょうげん】)を設けて小学校1・2年で実施していることにより、児童は、教科にとらわれることなく、自分の『思いや願い、問い』に向かって、夢中になって追究することができている。教員も児童の『思いや願い、問い』をもとに、その子なりの特長をより発揮しながら教科の本質に迫る姿を捉え、支えることができている。

【領域の教科化】 小学校高学年9～12歳期

【領域の教科化】でも、教員は児童の『思いや願い、問い』を大切にしつつ、その子の特長がより発揮されるように授業づくり、単元デザインを行うことにより、児童は【領域】で学んできたことをもとに教科の見方・考え方をより働かせて主体的に追究できている。また、小中接続の観点から4年生以降の「技術科」設置により、幼稚園での遊びや【領域】での学びを経て、自然とものづくりに親しんできた児童の「つくりたい」という思いや願いを生かした学習活動が展開できている。さらに、技術科で

は誰のためにつくるのかという「相手意識」を徐々に広げながらものづくりに打ち込めるようにすることで、中学校技術科の見方・考え方につながる素地を育む実践につながっている。

② 課題について

本校は令和5年度まで研究開発学校の指定を受けて、小学校1～3学年まで教科の枠を柔軟に捉えた「遊びの領域化」に取り組んできた。しかし、【領域】の授業では、各学級の中核活動と関連付けて児童の探究意欲を高めることができる反面、【領域】の授業における教科的な評価規準や育成する資質・能力が曖昧になってしまいがちである。また、その間に各教科で定められた授業時数を記録・確認するシステムを組織的に確立・運用しなかったり、教員間に授業時数を満たすという法令遵守の意識が薄くなったりした。これらにより、教育課程特例校となった令和6年度中に本校の教育課程表に示された当該学年での学習に必要な授業時数を確保できなかった一部の学級、教科があったことが判明した。

(2) 学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

① 保護者への学校評価アンケートの結果から

本校で実施している特別の教育課程「【遊びの領域化】【領域の教科化】によって育成しようとしている学習の基盤となる3つの資質・能力【自己表現力】【課題探究力】【社会参画力】が児童に育ってきているか」についての質問項目と、「幼小中を一貫した教育目標、カリキュラムづくりを進めていることをわかりやすく伝えているか」についての質問項目、「未来を拓く「地球市民」を育むために、児童の思いや願いを大切に、そこから探究的な学びが生まれるよう指導方法を工夫して授業をしているか」についての質問項目は、どの項目も肯定的な回答が8割～9割を占め、研究開発学校指定研究で取り組んできたことの内容や児童の姿にあらわれる資質・能力等を保護者が受けとめることができていると考える。引き続き、教育課程特例校指定の周知を図ると共に、幼小中一貫校としての取組や効果について発信していく。

② 児童への学校評価アンケートの結果から

「授業がわかりやすいと感じたり、楽しく授業に取り組んだりしている」という授業評価に関する質問項目については、肯定的な回答が例年並8割程度となったが、「よくあてはまる」の割合は昨年度より10ポイント程度減少した。各公開研究授業の際には、外部講師より各児童の主体的な取組や思考・判断力の高まりなどを評価いただいている。一方で、児童の意識からは、各自の取組のよさが十分感じられていないことが伺える。各領域・教科の授業では振り返りの時間をもち、児童自らが学びのよさを感じたり、これからの学習に向けて自己の取組を調整したりする力の育成を目指すなど、指導のあり方について見直していきたい。

5. 課題の改善のための取組の方向性

【領域】（【ことば】【かがく】【くらし】【ひょうげん】）の授業では、今後、1・2学年の【領域】の学習であっても教員自身が各教科で育成する資質・能力を意識して単

元計画を作成するよう研究を進めていく。そうすることで、本校の教育課程表に示された授業時数管理の意識を高め、児童にとってより本時のねらいがわかりやすい授業の展開につなげていきたい。

また、授業時数の管理に向けては、今後、大学本部や学部とも連携し、授業時数を記録・確認する実効性ある仕組みを構築するとともに、教員の意識啓発を図っていく。